

高校の英語授業へのCLIL（内容言語統合型学習）の導入

山 崎 勝
Yamazaki Masaru

1. はじめに

筆者の勤務する埼玉県立和光国際高等学校（以下、「本校」）は、2011年度より、上智大学との高大連携により、CLILの実践研究を行い、本年度で5年目を迎えた。本稿では、高校の英語授業へのCLILの導入についての私見を述べ、本校が英語の授業で目指している方向性について論じる。

2. 「英語を学ぶ」から「英語で学ぶ」へ

CLIL (Content and Language Integrated Learning) は、「内容言語統合型学習」と呼ばれ、「内容」と「言語」を同等に重視する。「内容」とは、教材で扱われている様々な題材内容のことであり、「言語」とは英語の4技能を高めるための学習を指す。

「コミュニケーション英語Ⅰ」等の通常の英語の科目の場合には、「内容」と「言語」の扱いの比率は1:1にはなりにくい。英語の授業の目的は英語の学習をすることであり、教材はそのための材料として存在する。例えば、題材内容が「地球温暖化」であったとしても、授業の目的は「地球温暖化」について学習することではなく、その教材を使って、単語を覚えたり、文法を学習したり、長文が読めるようになることである。検定教科書にも興味深い題材はたくさん載っているが、仮に「地球温暖化」を扱った課があったとしても、英語学習のための教材を提供する単なる1課にすぎず、通常は、「地球温暖化」が載っているという理由でその教科書が採択されたわけではない。英語（語彙、文法など）を学ぶことが目的だから、教材は学習すべき語彙と文法を提供してくれれば、内容は問わないのである。学習後に生徒が授業に対して持っている印象は、授業を通じて、「単語をたくさん覚えた」、「文法事項を学んだ」、「長文が読めるようになった」、等であり、題材内容についての印象はあまり残っていない。これらは、皆、「英語を学ぶ」授業である。

一方、「異文化理解」や「時事英語」等の科目は、内容中心の科目なので、「内容」と「言語」の扱いの比率を1:1にすることが可能で、CLILに適した科目である。これらの科目で題材として「地球温暖化」を扱う場合は、題材内容そのものがその科目を構成する大切な要素であり、そのトピックを授業のシラバスからははずすことはできない。この場合、題材内容は言語を学習するための単なる材料ではなく、言語の学習と同等の重みを持つ。題材内容を英語を使って学ぶので、「英語で学ぶ」授業である。

以上のように、英語の授業は、「英語を学ぶ」授業と「英語で学ぶ」授業の二種類に大別できるが、学校の教育課程として、外国語科の専門科目や普通科であっても学校設定科目を有する場合には、内容中心の科目を設置することが可能である。低学年で「英語を学ぶ」科目をすでに履修し、英検準2級～

2級程度の力を持つ生徒であれば、高学年で「英語で学ぶ」科目に移行することは容易である。本校では、「英語で学ぶ」科目として、外国語科の2年生に「異文化理解」、3年生に「時事英語」を設置し、普通科の生徒に対しても、外国語科を有する高校の特色として、外国語科の専門科目である「異文化理解」を3年次に選択履修できるようにしている。筆者が担当する「異文化理解」という科目は、国際問題（global issues）を扱っており、以下の内容を「英語で学ぶ」テキストは*CLIL GLOBAL ISSUES*（三修社）である。

- Topic 1 Stereotypes and Racism（固定観念と人種差別）
- Topic 2 Information and Communication（情報と通信）
- Topic 3 Culture and Fashion（文化とファッション）
- Topic 4 Health（朝食を抜くことによる健康不安）
- Topic 5 Food（食べ物は大切）
- Topic 6 A Sound Material-Cycle Society（循環型社会）
- Topic 7 Global Warming（地球温暖化）
- Topic 8 Energy（エネルギー問題）
- Topic 9 Ecosystems and Humans（生態系と人間）
- Topic 10 Endangered Species（絶滅危惧種）
- Topic 11 International Relationships（国際関係）
- Topic 12 War and Peace（戦争と平和）
- Topic 13 Human Rights（人権）
- Topic 14 Global Citizenship（地球市民）

3. CLILの「4つのC」

CLILを実践する上で使われるフレームワークは、「4つのC」と呼ばれるものである。それらは、Content（内容：題材内容）、Communication（言語：言語材料）、Cognition（思考：トピックについて考えを深める）、Community（協学：ペアやグループでの活動）の4つである。これらを有機的に統合することで最大の教育効果が期待される。「異文化理解」の授業の場合の「4つのC」の例を以下に述べる。

3.1 Content（内容）

国際問題（global issues）が題材なので、上記のTopic 1からTopic 14が具体的な学習内容である。各トピックは相互のつながりを考慮した順序に配置されている。

3.2 Communication（言語）

「言語」には、学習する「言語材料」とそれを使った「言語活動」が含まれる。言語材料は、トピックに関連した語彙や言語活動に必要な文法事項などである。言語活動は、4技能を使った活動として、Reading, Discussion, Presentationなどである。

3.3 Cognition（思考）

「思考」とは、授業で生徒に課す、思考を要するタスクのことである。以下に例を挙げる。

（例）「個人の食習慣を規定している要因は何か」（Health）、「食品廃棄の要因を考える」（Food）、「回転寿司と食品廃棄について考える」（Food）、「大量生産、大量消費、大量廃棄は、歴史上、どんな時に起こったか」（A Sound Material-Cycle Society）、「フードマイル運動と地産地消」（Global Warming）、「計画停電にどう備えたか」（Energy）、「発電所の分布図を見てその立地条件を考える」（Energy）、「日本のエネルギー政策はどうあるべきか」（Energy）、「生態系、食物連鎖と生物の睡眠時間を考える」（Ecosystems and Humans）、「生物の絶滅危機の原因を考える」（Endangered Species）

3.4 Community（協学）

上記の、思考を要するタスクを、クラスメイトとのinteractionの中で行う。英語の4技能統合的なタスクにグループワークで取り組む。手順としては、グループでリーディングやリサーチを行い、ディスカッションを経てライティング、それに基づいてグループでプレゼンテーションを行い、クラス全体で質疑をする。

4. 「4つのC」の統合と英語の授業の質の向上

CLILにおけるキーワードは「統合」である。「4つのC」がばらばらではよい授業にはならない。「内容」と「言語」の統合ができていないと、授業中の生徒の英語の使用は少なくなる。「内容」と「言語」が統合されていても他の2つのCが欠けていると、英語での知識習得に重点がある授業になってしまう。「思考」があっても「言語」が統合されていないと話し合いは日本語になる。「思考」を伴わない「協学」は、単なるゲームやドリルの域を出ない。

そこで、授業をCLIL型に転換するために、「異文化理解」の授業では、年間指導計画を立てる際に、「題材」シラバス、「言語材料シラバス」に加えて、「思考」と「協学」についてもシラバスを作り、どのレッスンでどのようなことを行うかをあらかじめ計画している。従来の英語教育で不十分であった要素は、この「思考」と「協学」である。本校では、「協調学習」も「思考」と「協学」を満たす活動の一形態と考え、CLILの授業の中で実践している。正解のない問いに自分たちなりの解を出すアクティブラーニングもCLILの「思考」と「協学」の中で行うことができる。文科省が提唱する「英語の授業は英語で」は、「内容」と「言語」が統合すれば可能である。これは、従来から、Oral IntroductionやStory Retelling, Summary Writing等の中で実践され、方法論もすでに確立されている。「内容」と「言語」に、さらに「思考」と「協学」が加わり、「4つのC」が相互に統合されて授業が構成されれば、英語の授業の質は大きく向上するだろう。CLIL型の授業にはそのような可能性がある。

5. 「学習スキル」の指導

CLILは内容言語統合型「学習」であるから、生徒自らが学習スキルを身につけることも重要である。授業を離れても、自立した学習者として自ら学ぶことができないといけない。そこで、生徒の授業外

での学習を支えるスキルとして、以下の内容をCLILの授業の中で指導している。

Study Skills:

| | | |
|----------|--------------------|----------------|
| スピーキング | (1) ディスカッション | (2) プレゼンテーション |
| リーディング | (1) 速読 | (2) 精読 |
| リスニング | (1) 聞き取り能力の向上 | (2) ノートテイキング |
| ライティング | (1) アカデミックライティング | (2) プロセスライティング |
| | (3) プレイジャリズム | |
| リサーチスキル | (1) 情報収集法 | (2) 情報記録法 |
| | (3) 思考捻出法 | (4) 批判的思考法 |
| アカデミック語彙 | (1) 単語ノートの作成・意味の推測 | |

6. CAN-DO リストと本校の目指す英語教育

本校は、CEFR-Jのレベル設定に従い、生徒の入学時から卒業時までの英語力について、普通科でA2～B1、外国語科でB1～B2を目標にCAN-DOリストを作成している。「異文化理解」のシラバスでは、4月のオリエンテーションで以下の目標を生徒に示している。

Listening : 国際問題 (global issues) について、ニュースを聞いて理解できる。

Speaking : 国際問題 (global issues) について、ニュースの内容を説明したり、ニュースについて意見を交換することができる。

Reading : 国際問題 (global issues) について、ニュース記事を読むことができる。

Writing : 国際問題 (global issues) について、ニュースの内容を説明する文章や、ニュースについての意見をまとめた分量で書くことができる。

7. 英語教育の高大連携について

本校は、高校の英語の授業の最終ゴールを大学入試や英検等の資格試験とは考えていない。もちろん、それらは途中のゴールの一つにはなりうるが英語学習の終点ではない。大学での専攻内容の授業を英語で受けられるような基礎力を高校では養いたい。大学でのプレゼンテーション型の授業にも積極的に参加できるような発表力の基礎を高校では養いたい。「英語を使って」将来、何がしたいのか、また、大学で「英語で」何を学びたいのか、について高校時代からよく考え、高校での英語の学習が大学での英語の学習に繋がっていくことを願っている。

そこで、大学の英語教育に望むことは、専門の科目内容の学習が専攻する外国語を使用して行われ、専門科目の学習と専攻する外国語の習得が両立するような授業で学生を鍛えてほしいということである。大学の英語の授業がTOEIC対策に終始するようなものばかりになってしまったら、そのような大学に高校生は魅力を感じない。大学の高度な専門科目を「英語で学ぶ」方法として、日本の大学も、昨今、CLILに注目し始めている。そして、そのような学習の入口に至るところを高校の英語の授業は担っているのだと筆者は考えている。

参考文献

- 和泉伸一，池田真，渡部良典（2012）『CLIL（内容言語統合型学習）：上智大学外国語教育の新たな挑戦—第2巻 実践と応用』上智大学出版
- 笹島茂，他（2011）『CLIL 新しい発想の授業—理科や歴史を外国語で教える!?—』三修社
- 笹島茂，他（2014）『CLIL 英語で学ぶ国際問題』三修社
- 東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構（2015）「自治体との連携による協調学習の授業づくりプロジェクト 平成26年度活動報告書 協調が生む学びの可能性 第5集—学び続ける授業者へ—」
- 渡部良典，池田真，和泉伸一（2011）『CLIL（内容言語統合型学習）：上智大学外国語教育の新たな挑戦—第1巻 原理と方法』上智大学出版



山崎 勝（Yamazaki Masaru）
所属：埼玉県立和光国際高等学校教諭
Email：masyamazaki800@gmail.com